研究報告記事

OPU フォーラム 2011 に関する企画・運営デザイン

三原鉄平・越川茂樹・山本登志子

1. はじめに

本稿は、岡山県立大学の研究展示発表会「OPU フォーラム 2011」実行委員として、また実行委員会内のワーキンググループメンバーとして企画・運営に携わった立場から、OPU フォーラム 2011 の企画意図やグランドデザイン、またその検討過程等について記録し、大学で各種外部発表イベントを企画する際の、参考資料となることを目的としている。

2.OPU フォーラムの概要と現状

OPU フォーラムは、本学の研究の状況を広く地域社会に紹介することにより、地域の企業・団体との共同研究や協働事業等の「産学官民連携活動」のきっかけづくりや機運高揚を図ることを目的に、年 1 回開催されている研究発表イベントである。毎年開催となった 2007 年以降は、概ね 800 名前後の来場者数を迎え、定例イベントとして学内及び関係企業の間では定着してきた感がある。しかし学外参加者数が徐々に低下傾向にあり、新たな変化が求められるタイミングに差し掛かっている。

3. 企画の視点

平成 22 年 11 月に第 1 回の実行委員会が開催され、まずはワーキンググループ（保健福祉学部 筒井准教授、情報工学部 越川准教授、デザイン学部 三原助教、共同研究機構 小林コーディネーター）にて素案づくりを行うこととなった。ワーキンググループで企画について話し合いを重ねるうちに、以下のような問題意識が浮かび上がった。

ワーキンググループのミーティング風景

3.1 公立大学法人の今後のあり方

公立大学法人としての存在意義と役割を先鋭化すると、地域とのかかわりが重要な焦点となる。特に 2020 年以降に一段と進む少子化と、財政の長期にわたる悪化を見据えたとき、地域社会との結びつきをより一層深化させる必要に迫られている。

3.2 フォーラムにおける「地域」とは何か

一口に「地域」と言っても、その捉え方は「総社市」「岡山県」「中国地方」「日本」「アジア」と様々なスケールで捉えることができる。研究対象、教育対象、財政基盤などを考えてみてもそれぞれに捉え方は異なる。本学の OPU フォーラムにおける「地域」の定義を改めて考えたとき、足場としての総社市と、支持基盤としての岡山県民に、大学主導で存在価値を PR できる貴重な機会として捉え直すことができる。内部に向けた情報共有や全国に向けた情報発信も重要ではあるが、OPU フォーラムの意義と発信力を鑑み、比較的近い範囲を「地域」と捉え、ターゲットを絞り込むべきではなだろうか。

3.3 専門性と一般性

研究展示会とは、一般的に考えれば非常に特殊なものである。多くの来場者にとって、自分の仕事や生活との関連性を即座に見出すことは難しい。しかし OPU フォーラムにおけるメインのコンテンツはあくまで研究展示であり、来場者のターゲットを比較的近い範囲の「地域」に設定したとき、この相反する課題の解消が重要なポイントとなる。来場者には研究展示の見方や自分との関連性に関する気づきを提示し、発表者や関係者にはそれぞれの研究における一般性や普遍性を意識するしかけづくりができるか。これが企画立案における発想の起点であり、正否を判断する基準でもある。

3.4 大学の意識と姿勢

大学は学術研究及び教育の最高機関であると位置づけられてきた。それゆえ外部からはある種の敷居の高さを感じさせ、また内部においてはそれを無自覚に前提化してしまい、つい上から目線になるという危険性がある。しかし本学のように「実学」に重きを置く場合、実際的な現場にこそ高い先進性や優れた実効性が存在する場合も少なくない。「貢献」や「協力」という言葉の裏には、無意識的に上からの目線が含まれている。これらを「協働」や「共創」として意識的に捉え直し、その姿勢を具体化する必要があるのではないだろうか。

*MIHARA Teppei　デザイン工学科

4.OPU フォーラム 2011 のグランドデザイン

4.1 テーマ

絞り込んだターゲットを反映し、かつ来場者と同じ目線に立つ意思を含んだ言葉を検討した。いくつかの候補の中から、実行委員会での審議を経て「躍動する地域づくり」を OPU フォーラム 2011 のテーマとした。テーマに力を与えるためには、単なるフレーズではなくコンセプト（行動を取捨選択する基準）にすることがより重要である。それが一貫性と具体性を担保し、発信力の源泉となるからである。

4.2 シンポジウム

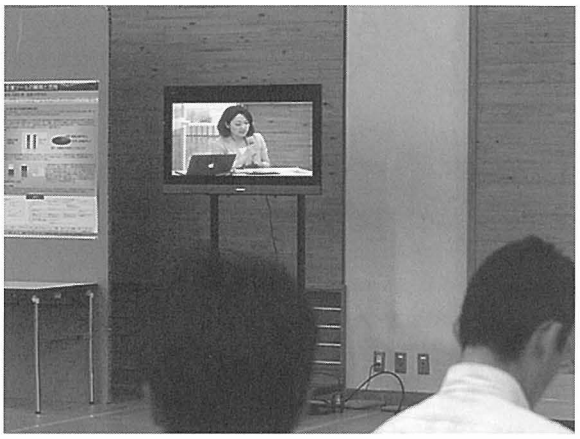
過去のフォーラムにおいて、集客の目玉に据えていたのは、各年度の担当学部に関連する特別講演であった。一定の集客を見込める一方、講演と展示会場が別棟で行われていることもあり、必ずしも展示会場への誘導につながらない面があった。

2011 年度は特別講演に代わりシンポジウムを開催することとした。来場動機が弱まり外部からの来場者が減ることが予想されるが、タレントの知名度に頼った地域振興イベントに見られるようにイベント自体の本来価値を高める努力をしなければ、後には何も残らなという危うさを孕む。今年度は本来のコンテンツである研究展示の価値と、来場者の満足度を高めることを優先し、フォーラムのテーマと同じ「躍動する地域づくり」をシンポジウムの主題とした。ねらいは研究展示に対する視点と関連性を提供し、来場者の興味と理解を促すことにあった。

パネリストの選定やシンポジウムのシナリオ、会場設定についても、同様のコンセプトを貫いている。これまで大学にかかわりがあり、かつそれぞれ立場が異なる外部パネリストと、地域にかかわりの深い活動をしている内部のパネリストを交え議論することで、これまでの実績を PR し大学の協働姿勢を内外に示すとともに、来場者と課題を共有し、興味と理解を深めることを意図した。

シンポジウム

さらにシンポジウム会場と展示会場を中継で結ぶという試みを実施した。ねらいは会場の一体感の演出と、シンポジウムによって研究展示を側面的に解説することである。質疑のタイミングでは、意図的に展示会場からの声をピックアップすることで、臨場感を高めることに成功した。これは入念な打合せと、コーディネーターの力量、円滑な中継の実現等によって支えられた。



シンポジウム中継

4.3 B 級グルメ出店

ターゲットを近い範囲の「地域」に絞り、より幅広い層の来場動機を高めることを目的に、岡山県下の有名 B 級グルメ店の誘致を計画した。本来、研究発表イベントには馴染みにくい企画であり、アカデミックな雰囲気を削ぐという懸念から実行委員会内でも議論を呼んだ。しかし地域振興という観点で今回のテーマと親和性が高く、またターゲットやコンセプトが明確になったことで、小規模な範囲であれば異物を許容することができると判断し誘致を決定した。実施に際しては「地域の食」というカテゴリーを設け、研究展示と同質の見え方になるよう配慮する一方、屋外テントのみの出店として研究展示と場を切り分け、全体のバランスに配慮した。

B級グルメ

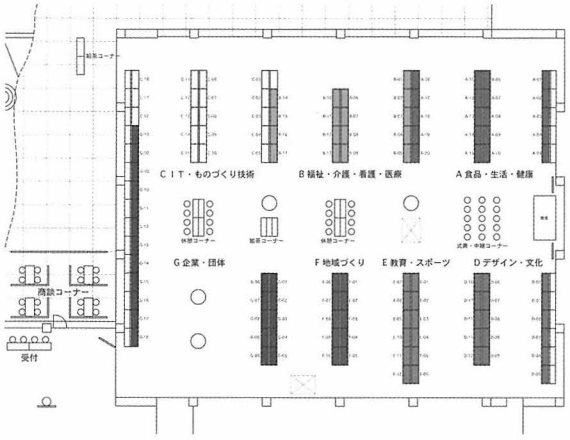
*OPO フォーラム 2011 に関する企画・運営デザイン　三原鉄平

4.4 展示会場

メイン会場である展示会場は、例年、壁面にブースを寄せたロの字型ベースのレイアウトを採用していた。このレイアウトの利点は、会場全体を見渡せることと、各ブースを等価に見せ易いことである。

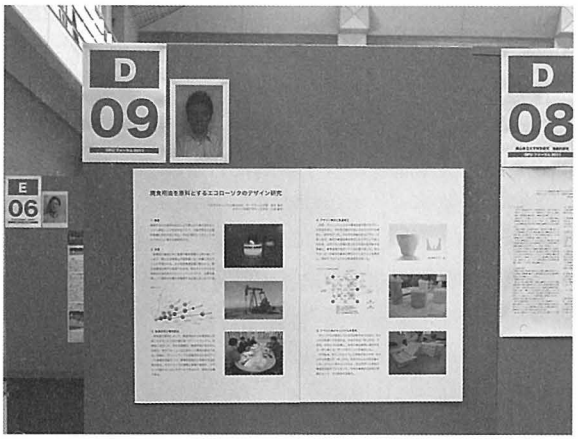
OPU フォーラム 2011 では島型のレイアウトプランを採用した。このレイアウトは、メインの導線と基本のレイアウトラインを設定しておけば、ゾーニングや後の調整が比較的容易である。またメイン導線に近いところに見せたいものを配することで、展示会の性格を特徴付けることができる。特にコンセプトが明確な場合には有効であるため、今回は全体テーマに即した研究や、話題性の高い研究を導線側に配することができた。

さらに個々のブースにおいては、展示区分と通し番号を掲示しリーフレットと同期させた。分かり易さへの配慮として当然ことではあるが、リーフレット入稿後の突発的な変更に対応しにくいため、広報物には通し番号を入れず、当日の配布資料で対応する展示会も少なくない。さらに出展者の顔写真を掲示して頂き、来場者がコミニュケーションをとり易いよう配慮した。



展示会場レイアウト

展示会場



各ブースのサイン

4.5 その他の企画

例年、多くの来場者を見込める企画として健康測定コーナーがある。例年 1F エントランスの正面で開催していたが、より広いスペースの確保とシンポジウムへの誘導も兼ねて、2 階シンポジウム会場の隣に配した。

なお、1F エントランスの正面には、より落ち着いた打合せが出来るよう商談コーナーを設置した。

健康測定コーナー

商談コーナー

5. 開催結果

5.1 来場者数と満足度

来場者数は、一般来場者数262名、学内者数588名の計850名であった。2007年の888名に次ぐ数字だが、依然として一般来場者は低下傾向にある。一般来場者のアンケート結果から、来場動機としてシンポジウムをあげた割合は約9%、B級グルメを挙げた割合は約11%であり、やはり特別講演ほどの誘因効果はなかった。しかし研究展示に関する満足度（5段階評価で「大変満足」「満足」）は、前年度比で22%（一般来場者29%、学内者19%、回収率5%）向上している。研究展示内容が異なるため単純な比較はできないが、概ね狙った効果が得られたように思う。

5.2 シンポジウム

シンポジウムの参加者数は137名であった。予定席数が80名であったことを考えると盛況であったと言える。内容に対する満足度（5段階評価で「大変満足」「満足」）は、全体で67%（一般来場者63%、学内者100%、回収率24%）であった。初開催であるため過去との比較はできないが、自由記述の意見から推察すると、内容は概ね好意的に評価されている。主な不満は、健康測定コーナーと同居したことによる騒がしさや、モニターの見にくさなど環境面に集中しており、今後開催する場合には配慮が必要である。

5.3 展示会場

会場の配置についての満足度（5段階評価で「大変満足」「満足」は、全体で70%（一般来場者70%、学内者70%、回収率5%）であった。過去に来場したことがある一般来場者のアンケートに注視すると、概ね見やすくなっていると評価されている一方、やはり入り口から会場全体を見渡せないという不満があった。また気になる指摘として、何学部の展示か分からないという意見が数件あり、領域研究のような学部横断的な取組みが増えている影響もあるが、内部で共通了解になっていることこそ丁寧に説明する必要があることを、改めて認識させられた。

6. 結語

今回のOPUフォーラム2011では、地域と大学の関わり方に焦点を当て、そのインターフェイスとしてのイベントのあり方を模索した。本来研究発表とは、研究への意見や評価、新たなパートナーとの出会い等を求めるものであり、地域と大学というテーマには馴染まない部分も多い。しかし自分達の立脚点や、そのことが持つ意味について自覚的であることは、非常に大切なことである。制約や不自由さが、新たな価値や魅力の種となることは、人も組織も同じである。

今後のOPUフォーラムが、さらに有意義なイベントに発展することを願う。

参考文献

1. 岡山県立大学 社会貢献年報 2007
2. 岡山県立大学 社会貢献年報 2008
3. 岡山県立大学 社会貢献年報 2009
4. 岡山県立大学 社会貢献年報 2010
5.OPUフォーラム2011要旨集
6. 文部科学省「学校基本調査」
7. 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来人口推計」

*OPOフォーラム2011に関する企画・運営デザイン　三原鉄平